

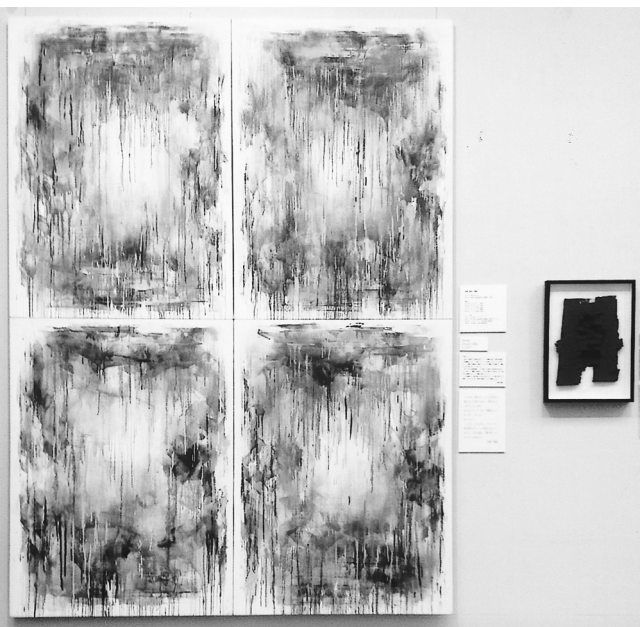
先の詩集『翻訳』のときに表紙絵として使わせていただいた画家の浪越篤彦さんから『誰にもわかる抽象画展』という案内状をいただいた。「わかりにくいイメージのある抽象画への入口として作品にやさしい説明書きを添えたグループ展」だそう

だ。
先号のこの欄で、作者は黙して語らず、作品は読者、観客の偏見、誤読によって作品となる、などとえらいそうなことを書いてしまったので、浪越さんからの案内状には解説文を添えるということについて恐縮するような添え書きがあつたが、なんのなんの、そのことはよく個人の問題であつて他人に強要することでもないし、それに、そんなえらいそうなことをいったばかりにしても、まったく自分の作品について語らなかつたということもないし、それに、どの世界にも入門書はあるのだし、入門書をきっかけにその世界に目覚めることだつてあるだろう。詩だつて、中也是入門書みたいなものだ。

今回の試みも、たとえ作者がなにかを語るといふ押しつけを別にすれば、抽象画にとまどつているひとたちには格好の入門書となるかもしれない。しかし、ともおもう。抽象画ほど「自分読み、勝手読み」のできる分野はない。その愉しみははかりしれないのにもつたいなあ、とおもつた。昔から、専門家の解説に納得して、それでなにかを知つたような気分になつて

いるひとがいるのだが、もつたいなあ。
で、車で一時間ばかりの香美市土佐山田町の香美市立美術館に出かけた。

作者が「おとな向け」と「こども向け」の解説を書いて作品



だもリラックス」。

ここに紹介するのはカラーでないので作品の印象はだいぶ違ってくるが、軽やかな旋律となつて空間に拡がっていく、という浪越さんの解説文とは反対の、呼吸が浪越さんの体内に閉じ込められていく、という印象を受けた。

ときとして作品の製作過程で、自分の意図とはずれた方向に

の横に貼つてあつた。なかなか難しいことを書いていて解説文の解説文が必要な文章もあれば、ここぞとばかりに力みに力んで、自分の思いの丈をおちまけている解説文（とはいへ、若いうちには自分の作品をわかってももらいたい一心で力むのはしかたないのだが）があつたり、反対に解説文などいらない解説文、蛇足のような解説文もあつた。それはたとえば、キャンバスを朱色に塗り上下に金色の輪、正円ではなく手書きの雑な形の円がはみ出んばかりに描かれている作品で、タイトルは『記憶の夏』まつりがやつてくる。タイトルと作品を見れば祭りの楽しかつた記憶とそこに集つていた人たちの昂揚感、あるいは親和力などが作品をおして観客に伝わってくるはずなのに、それをわざわざ、おとな向きには「単純な色と形でおまつりのウキウキした気分やエネルギーが感じられる」。こども向きには「夏のおまつりは暑そう」と解説文があつた。いらないだろうに。

で、浪越さんの作品だが、四枚ひと組の『Breath（呼吸）』と小品『Reef（岩礁）』の二点。『Breath（呼吸）』はフルカラーで、『Breath（呼吸）』は濃紺のグラデーション。

『Breath（呼吸）』のおとな向けの解説には「冷たく光る金管楽器に人の温もりを帯びた息が吹き込まれ、そこに音という響きが生まれ、それらの連なりは音色となり、軽やかな旋律となつて空間に拡がっていく。その映像から語り掛けられたように、ふと思ひ浮かんだ言葉、それがBreath（呼吸／息遣い）という単語でした」。こども向けには『Breath（呼吸）』とは呼吸のこと、すーはーすーはー、ゆつたりで、こころも、から

転じてしまふことがある。それは作者にも無意識的なことで、作者は自分の意図通りの制作過程であるとおもつていながらもかわらず（浪越さんは金管楽器の音色が軽やかな旋律となつて空間に拡がっていくといつていっているが）、その実、浪越さんの無意識のなかには、自分のBreathは自分が思つているほど開放的で自由だろうか、というだれもがもつ自己懷疑を知らず知らずのうちにみずからの意識の奥にため込んでいるのではないだろうか、とおもつたりした。

その無意識がBreathを外に吐きだす（世間のなかで自分と他者を共有する）とき、かすかなためらいと抵抗と抑圧がこの絵にあらわれてしまつたのではないだろうか。ひとはさまざまな感情を蓄積して暮らしている。良い感情もあれば悪い感情も当然ある。自分では認めたくない悪意や嫉妬、憎悪、それらはそれら自身の形を整えることなくひとの心のわずかな隙間に幼虫の姿で点在している。もしかしたら浪越さんは自分のBreathを否定してみたいという欲望、抑圧された心の奥底に棲まう欲望があるのではないだろうか、などふとおもつた。自分のBreathを否定するということは、自分自身をも否定することになるのだが、浪越さんに限らずだれも皆、いまある自分の仮面をはぎ取り、真の自分を顕在化させたいという叶うことのない欲望に悲しいかな取り憑かれていく。そのために画家はキャンバスに、詩人は原稿用紙に（パソコンのひともいるが）むかう。そこには無意識下に堆積しているひとそれぞれの欲望の層がマグマのように渦巻いているのだが、地表からはその気配はわからない。しかし、描かれた絵は、書かれた詩は、作者の気持ちを裏切つ



て、あるいは、作者の潜在している欲望そのままに絵画として、詩として顕在化してしまう。いくら作者が抗弁しようと。そんなふう浪越さんの『Breath (呼吸)』を見てみると、隣に置か

れた『Reef (岩礁)』が浪越さんのBreathから吐きだされた浪越さんの無意識の顕在化ではないとおもわれてくる。それを浪越さんは的確に「岩礁」と名付けてしまった。で、この無意識の顕在化としての岩礁とはなんなのか。それはこの二組の絵を見た観客がそれぞれのおもいとして問いかけはじめるものとおもおう。

『Reef (岩礁)』のこども向けの解説文がおもしろかった。この一文がこの合同展の主旨代わりをしていた。「見れば見るほどへんてこりん！ うーん、どうやって描いたんだろう？ ちょっとさわってみたいけどダメだねー 絵を見る君の心に生まれる色々な気持ち、少しずつ、君と絵を、近づけてくれます」。やはり、絵も詩も、観客と読者のそれぞれの思索の試行錯誤から作品が成立する、浪越さんもそう言っていた。

北側の「プリンス」という喫茶店でアイスクリームを食べるのがならいだった。その父親も、中学2年のとき肺結核で入院していた高知市池の療養所で痰を喉につまらせて死んでしまうのだが、まあ、それ相応に好き勝手生きてきた人生だったような気がする。もっとも戦争に行つて生きて帰ってきた父親のころに消すことのできない闇があったのかどうだったのか、中学2年までしか知らない父親像からはなんとも言えない。(南の島で笑っている兵隊姿の写真を見たことがある)

山田には18歳までいたのだが、中学と高校は高知市内の学校に通つたので山田での遊びの記憶は小学校までしかない。朝7時頃の汽車で出かけて夜にならないと帰宅しなかつたし、その当時は土曜日も授業があった。

こどものころの思い出はなんといっても夏祭りである。町中に提灯がともされ、おなべが練り歩いた。楽しかった思い出しかない。八王子宮への参道は屋台で賑わつた。そのあやしげな香具師の口上がこども心をワクワクさせて、口車に乗せられてゲームに小遣いを突っ込むとたいがいはずれで岩おこし一枚貰つた記憶がある。残念な気持ちと奇妙な満足感が交差していた。いまは夏祭りはイベントの一種に近いがそのころは町中あげての娯楽だった。八王子宮には奉納相撲の土俵があって、祭りの夜は素人相撲で賑わつた。若乃花、栃錦が人気のある時代だった。ちなみに父親は取り組みの勝者に賭けるといふ相撲バクチをしていたのだが、つねに若乃花と栃錦には賭けなかつた。強い者が負けることに金を賭けていた。

いまでもその土俵は健在だが、夏祭り当日ここで素人相撲が

美術館の隣に八王子宮がある。市のHPから「室町時代、近江国(現在の滋賀県)から山田氏の家臣、野口総左衛門が勧請したと伝えられ、野中兼山が中井川を掘る際、寛永十七年(1640年)に現在の北本町に移動しました。現在の本殿は棟札や建築様式などから文化五年(1688年)の建立で、十九世紀頃に改造がおこなわれた可能性があります。市指定文化財です」

その横は小高い山になっていて、桜の名所として知られている八王子公園で、頂上には水源地と忠霊塔がある。久々に足を伸ばしてみた。

この町には4歳から18歳まで暮らした。生まれは高知市の宝永町48番地だが、中島町、梅が辻と転々とし、4歳のとき山田(そのころはまだ香美郡土佐山田町で、ただたんに山田と呼んでいた)に引越した。昭和27年ごろのことだ。

父親が水道工事業をやっていて、町からの要請だったのか、父が押しかけたのかは知らないが山田へ転居して、町指定の水道工事業者になった。こどもだったので仕事のことにはよく覚えていないが、町では唯一の水道工事業者だったので、儲かることは儲かったらしい。そのころ高知市には「椿」と「リラ」というキャバレーがあつて、父親はそこで豪遊して自分の運転する車で山田まで帰ってきていた。よく事故をおこさなかったものだ。クリスマスになると家族で高知市まで練り出して、わけのわからぬどんちゃん騒ぎをした記憶もある。中の橋の電車通りのビルに二階に「ジン」というレストランがあつて、山田から高知へお上りさんで行つたときはそこで昼を食べ、高知大丸

行われているかどうかは知らない。その横の石段を上っていくと頂上には水源地と忠霊塔がある。この周辺ではよく遊んだ。水源地は立入禁止だが、柵をよじ登つて水源地の頂上に立つと太平洋がよく見えた。水源地の坂を転がって遊んだ。こどものころはそんな他愛ないことが楽しいものだった。おとなになると、他愛ないことがおもしろい、とおもわなくなるのはなぜだろう。この世界のあらゆることに意味を見いだそうとするからだろうか。ジャック・ラカンが言語で現実を語ることはできないが言語でしか現実を語ることはできないと言っている。語ることのできない現実を語ろうとする欲望をもつようになったとき、ひとは、他愛ない現実を愉しむことができなくなったのかもしれない。

こどものころは隠れん坊なんかして喜んでいたが、あれはフロイトの糸巻き坊やを再現していたのだろうか。母親の存在と不在を遊びに転化して快感と不快を体験していたのだろうか。だとしたらおとなになって隠れん坊をすることがなくなったのはそれなりにわかるのだが。いや、それでも、恋人同士ケンカをしたときなど電話に出ず不在をよそおうのはその延長上のことかもしれない。ひとはときどき相手に腹がたつと不在をよそおったりすることがある。あれは2歳児のこどもが遊ぶ、糸巻き遊び、母親の不在を糸巻きを隠すことであらわす遊びの延長上にあるのかもしれない。そして、糸巻きを自在に扱うことによつて、あらわれたりいなくなったりする母親(=恋人や大切な他者)を自分で操ろうと試みているせつない愛情の表現かもしれないとおもつたりする。

忠霊塔には先の戦争で亡くなった町出身者の氏名が記されている（父親は幸運にも帰ってきたのだが）。いまこの国では安倍某主導のもとで安保法案というのが成立した。反対者は戦争法案といっているがぼくはその中身を詳しく知らないのでもなんとも言えないが、安倍某の言っていることを信じられないのは、過去に安倍某が言った言葉の数々、やってきたこと、それらを見ると今度の法案も信用できないなあとおもってしまうからだ。おもってしまうというのは感情的なこと、法案を理解して日本の行く末を考えたりしていないので論理性はない。ただ、安倍某の言ってきたことやってきたことをおもおうと、今度の法案もあやしいものだとおもうしかない。

そうはいっても安倍某の政党は先の選挙で多数を得ているのだし、それが議会制民主主義といってしまうばそれはそうだろう。いやいや、少数意見に耳を傾けてこそその民主主義だといひともいるが、権力者にとっては小バエのようなものだろう。しかしその小バエがあちこちで異議を挟んでいる。70年代とは違って、学生だけではなく主婦、年寄りらがそれぞれの世代の言葉で異議を挟んでいる。文学者（ぼくにはなじめない肩書だが）の声明もいろんなところを出されている。あまりにも紋切り型でもうすこし文学者らしい切り口がないかとおもったりはするが。

そんななか、新規に立ち上げた文学者団体の記者会見の発言が新聞に載っていた。「国会を通過すると国民は忘れてしまう。そうあつてはならない」だから、文学者は声を上げるのだ、と。ほほおーと感心した。こういう高みからものをいうのか、と。

ごっこをした。陣地を構えて、それを攻略する闘いだつた。

いま安倍某はおとなの戦争ごっこをしたがっているようだ。高知新聞は安保法案反対の意志を鮮明に出している新聞だがそんな熱心に読むことはないの、解説をちらちら読むこととわかったことは、安倍某が近隣諸国の脅威にたいしてアメリカと手を組んで「日本国民の安全」を守る法案を作るとアドバルーンをあげつづけたことと、それに対して自民党内からは、もうすこし冷静になって考えてみよう、といったような意見が出なかったということだ。

こどものころの戦争ごっこはひとは死なないがおとなの戦争ごっこはひとが死ぬ。それでもいざいざときは自衛隊員に「日本国民の盾」になるといふ誇りを持ってこのだろうか。9・11のときブッシュがアメリカ国民を煽りに煽って国民もそれに応えたが、それほど国のことをおもうならアメリカ国民を代表するブッシュが先頭に立ってアルカイダをやっつけに行けばいいとおもったことがあった。『怒りのアフガン』という映画ではシルベスタ・スタローンがひとりアファニスタンに乗り込み上司を救出したではないか。ブッシュもひとりでアフガンに乗り込んでみたかどうか、などとおもったりしたもんだ。もし日本が他国と戦闘状態になったら安倍某は法案作成者としてみずから先頭に立って他国と闘うだろうか。総理大臣だからそんなことはできないというのなら、先頭にたつひとたちの声に耳を傾けてもいいとおもうのだが、まあ、自衛隊は上意下達の組織だから個人としての意見は言いだせないだろう。それが軍隊の悲しいところだ。

言葉尻をとらえてこんなことをいうのは多くの性格の悪さなのだが、国民は咽喉元過ぎるとばかになる、といっている。

たしかにアレクシ・ド・トクヴィルは「民主主義国家は自分たちにふさわしい政府を持つ」となかなか手厳しいことをいっているし、エーリック・フロムは『自由からの逃走』のなかでドイツ国民が自由を棄ててナチズムという権力に擦り寄っていった過程を書いている。だからなにか指針になるのが必要かもしれないが、「国会を通過すると国民は忘れてしまう」と言い切つて、そういう国民を啓蒙し、先頭に立っていくという役割を演じていくと宣言しているのは感心するが、それを傲慢とおもつかどうかはひとそれぞれだろう。

先にも書いたが、70年安保のときは学生運動が主で、思想武装、理論武装、過激な戦略、で市民から離れていく過程をたどってしまったが、いま、TVなどで見ていると学生から主婦年寄り幅広い反対運動がそれぞれの立場からの言葉で自分の意見を述べている。それでも安倍某は、60年安保のとき国会をとりまく群衆を横目に祖父、岸某が言った「声なき声を聞け」とおもっているのだろう、声をあげている反対意見は無視されている。小バエぐらいにしかおもっていないだろう。たしかに1億2千万人もいれば多種多様な意見があつて当然である。しかし、これまでやってきたことを振り返ると、安倍某のやることは危険だ、そんなおもいを大多数のひとがもっていることもたしかだ。

こどものころは八王子公園の山肌でチャンバラごっこや戦争栃木、茨城、宮城で堤防が決壊し、たくさんの方が亡くなつた。そのとき自衛隊が大活躍して、被災者をたくさん助け出した。自衛隊員の背中におわれて救助されている老人がTVに映っていた。高知も災害の多い県なので過去には自衛隊の活躍が新聞やTVで報道された。救助された老婆が涙を流して自衛隊員に礼を言っている姿も放送された。そんなときTVを見ているひとたちは自衛隊は国民の命を守っていると痛感するだろう。しかし、とおもう。自衛隊でなくてもいいのではないかといつもおもっている。災害救助隊というような組織を作つて災害が起きたら直ちに救助にむかう組織を常設しておけばいいだけの話である。

どこの国でも軍隊が国を守っているからと安倍某は自衛隊を軍隊と呼びたいらしいが、どこの国でもやっていることを真似しても独自性はうまれない。ここはひとつ、アメリカさんと手を切つて、なおかつ自衛隊を解散して、武装的には丸裸になつてみたらどうだろう。それを見た世界中の国が、武力に頼っている我が身をおもつて羞恥心を感じるかもしれない。いや、そうではない、これ幸いに中国や北朝鮮が攻めてくるというひともいるだろう。実際どう転ぶかわからない。だつたら一度武装を解除したらどうだろう。その金を福祉や教育に回し、ひとがひととして生きていける力を養う方途につかってみたらどうだろう。日本は武力では貢献しませんが、人材では貢献しますと世界に細々と宣言してみたらどうだろう。しかし、そんなバクチみたいな政策をとつて日本が減んでしまつたらどうする、と

いうひともいるだろう。だが、武力に頼らず生きていける道は日本国民が知恵を出しあえばいくつもあるのではないだろうか。日本国民は安倍某が言っているように「質実剛健」で賢い民族なのだから。

安倍某の言うように日本はアメリカと組んで近隣諸国の脅威を緩和しなければならぬ、という考えをもっているのなら、近隣諸国もそれに対抗する武力を整えることで自国の安全を確保するということになるのは、だれの目にもあきらかである。それでも近隣諸国の脅威を言いつのって武力拡大を望む声がある。なにをそんなに怖がっているのだろうか。日本が滅ぼされることなのか、自分が殺されることなのか。他人と闘ってまで自分だけは生き残りたいとおもっているのだろうか。そんな恐怖心は捨ててみて、一度「武力はやーめた」と言ってみたらどうだろう。もしかしたら、武力に頼っている自国を恥じる国が世界のどこかででてくるかもしれない。いやいやそんな国など出てくるはずもなく反対に、日本は自分の国を守ることを放棄したのかと呆れられるかもしれない。しかし「日本は武力を放棄した」と宣言したときの世界の反応見てみたいと能天気なことをおもっているのは、たぶん、ほくだけだろう。

父親が中学2年のときに亡くなった後、水道工事業を引き継いだ母親は苦労したようだ。幸いにも仕事には困らなかつたようである。その点の苦労はなかつただろうが、うちで働いている職人との人間関係で苦労したみたいだ。けっこうやんちゃな職人がいたし、飲んで暴れたりケンカしていたし、母親の手にあまる

もっているような錯覚に陥りはじめた。闇のむこうに永遠にづく空間があり、いま自分はその空間の中を浮遊しているんだ、無限の空間を生きているんだ、そんな感じを受けた。それは不思議な体験だった。たつた一畳ぐらいの空間を無限に変えてしまうテクニクを持っていて堀慎吉をすごいとおもった。高校生らしく感動していた。

それと堀さんとはもうひとつ因縁があつて、ぼくらの世代は団塊の世代と揶揄される世代で、おまけにぼくの通っていた中学と高校は経営上手な私学だったので一教室に70人ぐらいの生徒を詰め込んでいて、それが10クラスもあつたから高校だけで2000人を越えていた。そんな大多数が体育祭を催す会場がなく体育祭はなしで、文化祭も二年に一度だった。高校2年のとき文化祭があつた。そのころ文芸部にいたのだが、その学校には演劇部がなく、文化祭で演劇を催したほうがいいという学校の方針だつたとおもうが、演劇部をつくれといわれて演劇部をつくつた。そのとき演劇に興味があると堀慎吉さんに顧問になっていただいた。ぼくとしては高校生らしいオリジナルの台本でやるつもりだったが、堀さんは木下順二の『夕鶴』を提案した。そんなお決まりのものをやつたつてと反対したが、結局は『夕鶴』に決まつた。ふてくされたぼくは一応「部長」のまま稽古から本番までタッチすることなく傍から見ている。演出は堀さんがやつた。まあ、高校の文化祭にはお似合いの演目だつたかもしれないが。

その堀さんには、美術の教師にならないか、と言われた。そのころ高知大学には「特美」といって美術の専門課程が設置され

ことも再々あり、なおかつ辞めていく職人がいたりして、そんなこんなで大将の奥さんは職人との関係に苦労したようだ。

そのうち町役場が町外から来た業者にも町指定の水道工事業の資格を出したり、うちにいた職人が独立して水道工事業をはじめたりして競争相手があつたというまに増えて、仕事も先細りになつたようだ。儲けた時分に金を残すという性格ではなかつた父親だつたので蓄えもなく母親はそれなりに苦労していたみたいだつた。

ぼくは高知市内の私学に通つて、詩などという著にも棒にもかからないものに夢中で、家のことなどほとんどかえりみなかった。

高校時代は国語と数学（幾何もふくむが）の成績は良かったが、英語は嫌いで、その他の教科はまあまあというところだつた。いざ大学受験というとき、たいして行きたい学部もなくこのままぶらぶらと生きていきたいとおもつたりして、将来何になりたいとか、何をしたいとか、夢はあるのか、といった質問が一番苦手だつた。

美術部に堀慎吉という先生がいて、かれは平面もやっていたが立体も精力的にこなしていて、一番驚いたのはタイトルは忘れたが、ひと二人ぐらい入る箱があつて、その中は黒色で塗りつぶされ真つ暗闇だ。その中に入ると何も見えなくて真つ暗闇だけ。そのうちどこからかゴーという小さな音が地のほうから聞こえてきた。そうこうしているうちに目も暗闇になればじめた。そのとき、ゴーという音の効果もあつたのだろう、いまままで真つ暗闇の狭い箱だとおもっていた空間が無限の拡がりを

たばかりだつた。美術の教師になつておまえの好きな詩を書きながらぶらぶら生きていくのもいいぞ、なんて言われて、そういえば堀さんの授業は生徒に適当に絵を描かせて自分はぶらぶらしている二時間で、大学の受験には貢献しない授業だつたので、堀さんの誘いが魅力的にうつつた。そのころいつも遊んでもらつていた自称無頼派作家の英語の教師に話したら、そりやおまんにはぼつちりよ、と言われ、もうひとりの英語の教師（詩人と呼ばれていたが）にも、ええかもしれない、と言われてその気になつてしまった。どうやらざつとした（＝高知の方言。だいたい、おおよそ、おおよかな考え）ぼくは、ざつとした教師とばかり付き合つていたようだ。

だから高校三年の夏休みから美術部員に混じつて「絵を描く」特訓を受けた。人物画の基礎をまず教わつた。冬ごろにはそこそこ描けるようになっていたが、いかんせん、成績が国語と数学しか良くなく、「……にでもなるか」といったよこしまな考えが幸運を呼ぶことはなかつた。みごと高知大学は落第だつた。他の大学は受験しなかつた。いまから考えてみれば、何を考えて生きていたんだろうと自分でもおもう。五月ごろまでいわゆる浪人生活らしきものをしてしたが、もともと勉強が好きではない、というか、偏つた教科しか興味がなく、英語は勉強しようと思えおもわなかつた。（そんなぼくが22歳のとき英文科の女子大生と婚姻届を出してしまうのだが。彼女はジェイムズ・ボールドウィンを卒論のテーマにしていた。だからぼくも読んだのだが、もちろんぼくは翻訳本で。60年代アメリカ、黒人で同性愛者だつたボールドウィンは、人生はエデン

の園を思いだすとか、あるいは忘れ去ることかのどちらかだ、と『ジョバンニの部屋』のなかで書いている。)

わりして大学へ行くこともないと、浪人生活をやめた。仕方ない働くか、と知り合いの紹介でバーのバーテンダー見習いになった。その店は女の子五人ぐらいの小さなバーで、やくざの組長の奥さんがママさんをやっていて、高校を出たばかりのほくにはけっこう楽しい世界だったが、明け方まで働き、客に勧められて酒を毎晩飲んでいると若い身にもけっこう辛かった。本も読めないし原稿も書けない。だからこれも知り合いの紹介で喫茶店に移った。そこでもバーテンダーをやった。

そのころ日本の大学のあちこちでは大学に自治権を求めたり、大学の不正を糾弾したりといった学生運動が活発だった。そのうち安保改定に反対するといった政治運動もおこり、佐世保港にアメリカの原子力空母が寄港したとき(1968年)などは東京から大勢の学生が佐世保に乗り込み、それに賛同した市民と一緒に警官隊と武力闘争をやったりしていた。そんな同世代の運動に共感していた。権力と闘っていること、自分の主張を行動していること、など心情的にはかれらの側に立ってはいいたが、いかんせんぼくは個人主義、利己主義だった。デモなんてムリムリとよそ目に見ていた。誰かと一緒に行動したり、誰かと同じ言葉を叫んだり、肩を組んだりするなんてムリだったし、やれと言われてもできなかつただろう。おまけに武力闘争なんていわれると、絶対ムリムリだった。

だが)というチェーン店のひとつだった。19歳の若造に店長という肩書をくれたが、なかなか厳しい勤務形態で、しばらくして辞めた。

二軒目の喫茶店は、はりまや橋交差点のすぐ脇のビルの六階にあった。客席は全面ガラス窓で、夜になると繁華街のネオンが眼下に見えた。いまではカップルというらしいが、当時はアベックといていた男女のペアの客が多かった。ゲイの店長の好みでシャンソンやカンツォーネが一日中流れていた。そこで働いていたとき肺結核にかかった。父親が肺結核だったので、そういう体質を引き継いでいるのだからいつかはそういうことになるだろうと覚悟はしていた。それから一年二ヶ月療養生活を送った。入院生活は退屈だった。もともと結核菌は出ていないということで外出は許可されていた。だから夜になると高知市横浜にあった療養所を抜けだして繁華街に足をむけた。夜間の外出など認められるはずもなかったが、早い夕食(そのころは四時が夕食時間だった)を食べると病院前から出るバスに乗った。帰ってくるのはだいたい深夜で(タクシー代がないので、一時間あまりを歩いた)、療養所の入口で深夜勤務の看護婦に叱られ、明るる朝は婦長に叱られた。そんなこととしてと死ぬわよ!死ぬことはなかったが、病状は悪化した。それでも療養所を抜け出した。

こっちは毎日ヒマだが働いているひとはそうもいかない。だいたい遊ぶひとは限定された。

自営の古書店タンポポ書店が終わるのを見計らって中の橋に行き、詩人の片岡幹雄さんと遊んだ。二人とも金がなかったの

——我々が労働者階級と結合できなかったのは(我々は誰よりも労働者階級と結合することを望んだにもかかわらず)思想的に労働者の世界観に立ちきれず、労働者階級の歴史的使命と階級の根源から生まれる革命的能動性を認識できず、労働者階級を階級斗争に大きく、広く、深く立ちあがらせること、革命に組織することにより自己を一個の爆弾にかえてしまったことによると思っています。我々はドブレ主義や極左的なゲリラ主義には首尾一貫批判克服しようとする努力しながら、思想↓綱領↓権力問題↓プロレタリア国際主義↓党建設↓党組織問題↓戦術問題として我々の闘いを全的、弁証法的に総括できず、党の問題を戦術問題に解消し、ゲリラ主義に転落していったことといえます。——

右は、山岳ベースで仲間をリンチし、浅間山荘事件で逮捕された連合赤軍のBの獄中書簡(1973・6・20付)の一部。この定型文は自己収斂するだけで、読んだものの心を打たない。打たないどころか読んだとたん失語症になりかねない。どこにもB自身の言葉がない、革命が挫折した悔しさがなく、誰に伝えるのかといった具体性がない。この反省もかれ自身の反省ではなくかれの(借り物の)理論にそった反省でしかない。その後Bは日本赤軍のクアラルンプール事件の交換人員として釈放され、世界同時革命を旗印にしている日本赤軍に加わるのだが、今日まで世界同時革命はおこらなかった。

最初に働いた喫茶店は、オーナーが作家で画家(アマチュアで堀詰の東映の映画館の横の酒屋の暖簾を潜って奥に行き、塩をなめながらコップ酒を飲んだ。酒で勢いがつくと追手筋を奇声を発しながら走った。

版画家の日和崎尊夫さんはセザンヌという喫茶に行くに必ずいたので、かれとも遊んだ。かれはキス魔、抱擁魔でよくキスをされ抱擁された。ぼくが30歳で出版物発行の小さな工房を立ち上げたとき、ロゴマークというほどおぼろげなものではないが、工房のマークを彫ってくれた。いまでも使っている。本誌Sageの表紙に使っているマークだ。かれの版画は二度詩集の表紙に使わせてもらった。後年、横浪半島に居をかまえた。夜になると「ダイケケン、食べる物がない」「ダイケケン、米がない」「ダイケケン、……がない」と電話がかかってきた。いちおう頼まれたものは持つていくのだが、人恋しいだけだとわかっていった。半島の山肌に建てられた住宅からは夜の太平洋が静かに拡がり、陳腐な表現そのままに星が降るようだった。とさどき女房も一緒に行ったが、彼女も感動していた。

一番遊んだのはぼくの通っていた高校の英語教師で自称無頼派作家の小林一平さんだった。かれには公私ともに世話になった。こどもふたりもかわいがつてもらった。ここでは書きつくせないほどである。後年のかれは難病で姥捨て山のような病室で暮らしていた。病院や療養所に詳しい知人が転院をすすめたが受けつけなかった。まるで、おれの悪行はこの惨めさのなかで完結するのだ、とでも言っているようだった。あるときから見舞いに行ってもまったく相手をされなくなった。もうおれのこととはほっといてくれ、と言っているようだった。見舞いに行

くのをやめた。だからかれの死はその死から一年ほどたつて知人から知らされた。墓参りにも行っていない。来るようばんぜよ、と言われそうぞ。

療養所暮らしの憂さを晴らしてもらった三人だがすでに鬼籍に入っている。

そんな無為徒食の療養所暮らしをおくっていた間、東大安田講堂が陥落し、アポロ11号が月に着陸した。一年二ヶ月の療養生活が終わって久々に山田のわが家に帰った。父方の祖母がまだ健在で、おまえは体が弱いから役場に入りなさい、と言われた。年老いた祖母の言葉に反抗する気はなかったし、働くあてもなかったので町役場の臨時職員になった。

昭和44年、21歳だった。

仕事は固定資産税課というところで税金の計算である。前年の税金にたいして今年は97%（たぶんそうだったとおもう）の税がかかるからそれを計算する仕事である。そのころはまだ電卓などなくて、電卓の初期とかハンドルを回しながら計算をするタイプで毎日ガラガラとやっていた。固定資産税課には八人ぐらいの職員がいて、かれらは仕事がないときはお茶を飲んだりお菓子やミカンを食べたりして一日を過ごしていた。九月に臨時職員になったのだが、ちょうど稲の刈り取りの時期と重なって、兼業農家の職員は長い休みを取っていた。固定資産税課のひとも何人かは有休を取っていた。そのころは地方公務員の給料は安く、兼業農家でもしなないと暮らしていけないという話だった。貧しくはあったがのどかな田舎の公務員暮らし

小学校から高校まで一緒だった同級生の父親がやっている喫茶店でしばらく働かせてもらい、料理のあれこれも教えてもらいながら、調理師試験の受験勉強をした。幸いにも一発で調理師の免許をとれたので、叔母の貸しビルの一角で喫茶店を自営することになった。

例の堀慎吉さんが照明器具にも使える立体作品をたくさんもってきてくれてうれしかった。

連合赤軍の山岳ベースリンチ事件や浅間山荘事件、三島由紀夫の切腹事件、東アジア反日武装戦線の三菱重工爆破事件や昭和天皇暗殺未遂事件などを店のTVで見、高石友也や岡林信康の時代は過ぎ、小椋佳や井上陽水などの音楽が流れるなか、時代は淡々と過ぎていった。そんなに意欲があったのでもない喫茶経営は七年ぐらいでやめてしまうのだが。店の名前は「アダモ」、フランスの歌手サルバトーレ・アダモからとった。1966年22歳のときイスラエル公演をし、そのときイスラエルの平和を願った「インシャーラ」をつくって世界的にヒットしたが、反ユダヤからは激しい攻撃を受けた。

民族や宗教の違いからくる諍いはいまもつづいている。シリアからの難民が命からがら欧州に逃れてきているが、一部の国からは宗教の違いを理由に、あるいは自国民の労働が奪われるといった理由や、難民の中にテロリストがいるといった理由で、難民は迫害されている。自国から追われ、受け入れ先もないひとびとはこれからどう生きていったらいいのだろう。生活の貧困につけ込んでテロリストたちが勧誘しているという話もあるのだが。まあ、ぼくはいつも傍観者でしかない。そんなぼくが

しだった。ゆるやかで凡々とした日日だった。しかしただただ若かったぼくは、そのゆるやかで凡々とした空気に馴染めなかった。何になりたいとか何をしたいとか、先のことなど何ひとつ分らなかったが。

半年の臨時職員の仕事が切れる日、田宮高磨らの共産主義者同盟赤軍派がよど号をハイジャックして北朝鮮に行け、という事件が起こった。その日は仕事もせず役場のTVを見つづけていた。日本で革命ができなくて北朝鮮へ逃げて行くのか、それともかれらが革命で救うべき人民を人質にして、というおもしろい、それでもかれらは行動しているというおもしろい合っていた記憶がある。

祖母の勧めに従ってその年の役場の採用試験を受けたが、そんな意欲のない者が受かるはずはなかった。落ちたあと、うちと親しかった町会議員が「わしに言うてくれたら押し込んだに」と言われた。

そんな祖母もそれから間もなく息をひきとった。だったらもうすこし役場の臨時職員を勤めていればよかったとすこしおもった。

そんな時代にこれといって当てのない日々を暮らしていた。とはいっても働かずに暮らせるほど裕福ではなかったので、職探しだったが、これをやりたい、将来はこうなりたいという願望がなかった。唯一喫茶店なら経験があるので何とかなるだろうとおもった。

叔母が、いまは南国市になっているが後免町という町の商店街の入口にビルをもっていて、一部賃貸してくれるというので、難民の行方を心配してはじまらないのだが、安保法案で日本が戦争に巻き込まれて、自衛隊が全滅し、生き残った国民が難民として地球上を放浪するはめになるかもしれない。安倍某はそうならないための、自国を防衛するための法案だというのだから、武力を手段に選ば、きつと武力で減んでしまう。ぼくの立場は、この文明もいつかは減んでいくとおもっているのだから、明日滅ぼうが一年後、百年後に滅ぼうが同じことだが、安倍某のおとなの戦争ごっこが原因で減んでしまうのはすこし悔しいが、まあ、ひとは生きていけば悔しいことだらけなのでしかたないかなとおもおうが、そのときには一番先に安倍某に先頭に立つてもらいたいものだが、総理大臣、あるいは総理大臣経験者は特別な避難地があつて、最後は敵国と交渉して生き延びる算段を考えるだろう。そのことは納得がいかないが、これまで、これからも、世間とはそういうものだろう。